

を行うことで、有用な投与量設計を行う。【対象】1997年8月から1998年4月の期間に、当院にて治療を受けた MRSA 感染症患者15名【方法】ABK は一日一回投与を基本とし、全例 SBT/ABPC を併用した。点滴終了直後及び6時間後の2点採血とし、解析は Sawchuk-Zaske 変法を用いた。ピークを  $5 \sim 10 \mu\text{g}/\text{dl}$ 、トラフを  $2 \mu\text{g}/\text{dl}$  以下とした。【結果】有効例は、67% (10/15) であった。投与量の再設計は、8例でそのうち5例が有効であった。投与量変更後の予測値と実測値の差は  $0 \sim 1.58 \mu\text{g}/\text{dl}$  であり、概ね満足のいくものであった。また、副作用は、全例に認められなかった。【結語】ABK を有効かつ安全に使用するために、TDM は有用である。

#### 5) 血液培養より検出された $\alpha$ レンサ球菌の薬剤感受性

尾崎 京子・高野 操 (新潟大学医学部)  
岡田 正彦 (附属病院検査部)

【目的】最近 viridans streptococci は感染性心内膜炎 (IE) の起因菌以外に化膿性疾患や重症敗血症の原因菌として注目されている。当院で血液培養から検出された viridans streptococci について再同定を行い、臨床的背景、薬剤感受性について検討した。【方法】1991～1997年に血液培養から検出された菌株を対象とした。菌種の同定は主に rapid ID32 Strep (日本バイオメリュー・バイテック) を用いた。薬剤感受性試験は日本化学療法学会標準法に基づき、微量液体希釈法で実施した。試験薬剤は PCG, ABPC, CEZ, CTM, CTX, CZX, FMOX, CZOP, IPM, PAMP, EM, OFLX, VCM, GM の14薬剤である。【結果】7年間に viridans streptococci は28例30株分離された。内訳は IE 12例13株、その他の菌血症16例17株で、うち12例が造血管腫瘍を基礎疾患としていた。分離菌種は IE では *S. oralis* (5株) *S. anginosus* (3), *A. difectiva* (3), IE 以外では *S. oralis* が10株で、いずれも *S. oralis* が多かった。薬剤感受性は PCG に対し I ( $0.25 \sim 2 \mu\text{g}/\text{ml}$ ) が、6/30 (20%), R ( $\geq 4 \mu\text{g}/\text{ml}$ ) が2株認められた。R を示した株は *S. oralis* であり、これらは他の  $\beta$ -ラクタム薬にも高い MIC を示した。【考察】近年ペニシリン耐性肺炎球菌の増加が問題になっているが、この耐性遺伝子はこれと近縁な *S. oralis*-*S. mitis* が起源と考えられている。viridans-streptococci の臨床的意義と薬剤耐性

は、今後さらに重要になるとと思われる。

#### 6) A 群溶連菌感染症の臨床

仁田原義之・山田 謙一 (魚沼病院)  
五十嵐幸絵 (小児科)  
樋口あけ美 (同 検査科)

A 群溶連菌感染症は、小児科診療において最も一般的な疾患であり、平成8年当科の A 群溶連菌分離症例につき検討した。分離症例は226症例であり、12月をピークに秋～春に多く、夏少なく、他の報告と同様であった。発症年齢は4才を中心とした幼稚園児に多く、平均年齢5.6才で、男女比は同じであった。特有の発疹の出現率は54.0%で、平均年齢3.3才であった。起炎菌の分離状況は単独分離163例 (72.1%)、混合感染では、黄色ブドウ球菌31例、インフルエンザ菌18例であった。治療剤は、PC系 (SBTPC) 58.4%、各種経口CEs 34.4%、その他を10日間服用後、起炎菌の除菌の有無、細菌学的効果を再検討した。治療後の再検 (226例中204例) で、A 群溶連菌除菌率は、単独感染例93.9%、混合感染例91.2%で、いずれも高い除菌率であった。A 群溶連菌単独感染例163例の各種抗生剤治療後の常在菌化率では、SBTPC群 (91例) で82.4%、CEs群 (48例) で68.8%であった。分離菌の薬剤感受性は、ABPC, PIPC 耐性1株、MINO 耐性1株、CLDM 耐性2株以外、いずれも感受性であった。A 群溶連菌感染症の治療は、PCs系抗生剤が第一選択剤と考えられた。

#### 7) 急性胆道系感染症における迅速胆汁グラム染色の重要性

近 幸吉・杉山 幹也 (新潟県立坂町病院)  
鈴木 雄 (内科)  
小出 則彦・青野 高志 (同 外科)

急性胆道系感染症は、初期に適切に治療されず重症化すると多臓器不全をきたすことがあり、起因菌が確定する前の初期の治療が重要である。すなわち、できるだけ早期に (1) 胆汁うっ滞を取り除くこと (2) 適切な化学療法を開始することが必要である。

今回、腸球菌による急性胆嚢炎の症例を経験した。PTGBD を施行し胆汁ドレナージは得られたが、初期に SBT/CPZ を使用し十分な臨床効果を得られず、胆汁より腸球菌が培養され抗生剤を IPM/CS に変更し改

善した。

腸球菌はヒトの腸管や女性外陰部の常在菌であるが胆道系感染の起原菌としてその頻度は高く、グラム陽性菌全体の中では70%弱を占めている。腸球菌はセフェム系抗生剤は自然耐性であり、また最近ではペニシリン、テトラサイクリン系抗生剤に耐性化が進んできている。さらに1980年代後半より欧米ではバンコマイシン耐性腸球菌が出現し、現在では院内感染の重要な起原菌となりつつある。今後、日本でも院内感染の起原菌として問題になってくることが予想される。

高齢化社会となり、心疾患や糖尿病などを併発症として有する胆道系感染症が増加しつつある。急性胆道系感染症の診療においては起原菌の決定のため迅速胆汁グラム染色をルーチンに行い適切な化学療法を施行することが今後ますます重要になってくると思われる。

#### 8) 慢性涙囊炎の Fosfomycin 涙囊内注入によるサイトカインに及ぼす影響

大石 正夫(白根健生病院眼科)

目的:慢性涙囊炎は鼻涙管に障害を有する細菌感染症で、保存的治療(涙囊洗浄、点眼)により、時に慢性の急性増悪をくり返す難治性の症例を経験する。Fosfomycin (FOM)には本来の抗菌作用の他に、種々の生物学的活性を有することが報告されている。今回FOMの抗炎症作用を期待して、難治性慢性涙囊炎にFOM液を投与して、in vivoにおけるサイトカイン産生に及ぼす影響について検討した。

方法:3%耳科用FOM液1mlを涙囊内に注入、週3回2週間投与した。FOM投与前、後に涙囊洗浄液を採取して、ELISAを用いて各種サイトカイン濃度を測定した。

結果:IL-8は全ての検体で検出され、増減がみられた。IL-4は検出されなかった。IL-1 $\beta$ では増加がみとめられた。

今回の結果のみでは、FOMとサイトカイン量との間に何らかの関連を見出すことは困難であった。今後症例を加えて検討する予定である。

#### 9) TBA-80FRを用いての血清アミロイドA (SAA)の検討

井上 智美・早川 宏美(水原郷病院)  
柄沢 安雄(検査科)  
鈴木 康稔・関根 理(同内科)

血清アミロイドA(SAA)は急性期蛋白の一種で炎症の活動度や、治療効果のモニターに有用とされている。今回我々はSAAについて若干の知見を得たので報告する。

【方法】ラテックス凝集反応試薬「LZテスト'栄研'SAA」を用い東芝80FRにてSAAとCRPを測定した。

【結果】心筋梗塞例ではCRPよりSAAの方が発症後速やかに陽性を示し、ステロイド剤を投与している症例ではSAAのみ変動が見られCRPは陰性を推移していった。尿路感染症の症例ではCRP、SAAは同様な変動を示しながら推移したが、大腸菌消失時にはSAAは陰性に等しい値まで低下していった。

【考察】心筋梗塞例、尿路感染症の症例ではSAAの方がCRPよりも病態の推移をより速くダイレクトにとらえることができた。ステロイド剤を投与している症例ではSAAはステロイド剤の影響を受けないことが示唆されCRPより有効なマーカーとなった。

#### 10) 小児急性中耳炎症例における細菌学的検討

富山 道夫(とみやま医院耳鼻咽喉科)  
気管食道科

小児急性中耳炎の主な起原菌である*S. pneumoniae*、*H. influenzae*のnew oral cephem(CPDX-PR, CFTM-PI, CFDN, CDTR-PI)に対する薬剤感受性を検討した。その結果CDTR-PIは最も強い抗菌力を示し、CmaxをMIC<sub>90</sub>値で除した値(Cmax/MIC<sub>90</sub>)を指標とした検討においても、CDTR-PIは両菌ともに比較した薬剤の中で1位となった。CDTR-PIは小児急性中耳炎に対して今回検討したnew oral cephemの中で最も臨床効果を望める薬剤であると考えられた。またCDTR-PIを用いた小児急性中耳炎症例を提示し、治療上の注意点、問題点について述べた。